

い。今回、放射線科や心臓血管外科の協力を得てスクリーと血管との位置関係を確認し手術計画を立てることで、安全に除去術を行うことができた。

17. 高吸水性樹脂玩具の誤飲後、内視鏡的に除去した乳児の1例

臨床研修部¹⁾ 小児外科²⁾ 消化器内科³⁾

○渡邊 侑奈¹⁾ 鶴野 雄大²⁾

中井優美子²⁾ 岡本 光正²⁾

福澤 宏明²⁾ 三浦 公³⁾

堀 伸一郎³⁾

症例は0歳の女児。2日前から持続する嘔吐・活気不良で当院紹介となり、精査の超音波検査・CT検査にて十二指腸水平脚に30×25mm大の内部均一な球状の無エコー・低信号領域を認めた。また問診にて高吸水性樹脂でできた玩具誤飲の可能性があると判明し、十二指腸内異物による腸閉塞と診断、同日全身麻酔下に内視鏡的に異物を破碎除去した。高吸水性樹脂は水を含むと数十～数百倍に膨張する性質から紙おむつやインテリアなどの生活用品に使用されているほか、小児用玩具としても安価で発売されている。近年、小児の高吸水性樹脂誤飲の症例報告が散見される。高吸水性樹脂は菓子(グミ)に類似したその形態から小児の誤飲の危険性が高く、また誤飲した場合高率で腸閉塞をきたす可能性がある。高吸水性樹脂誤飲の危険性について、幅広く注意喚起を行っていく必要がある。

18. がん薬物療法における曝露対策

～閉鎖式接続器具の導入～

化学療法センター

石原 里美 大里 勇二

島田 健 中村 孝子

平松 靖史

抗がん薬は、抗がん作用がある一方で、細胞毒性を有し、発がん性や催奇形性、生殖毒性、遺伝毒性等を持つ。そのため、がん薬物療法を

受ける患者だけでなく、抗がん薬を調剤する薬剤師、抗がん薬を投与する看護師も抗がん薬の影響を受け健康への悪影響の危険性があると言われている。特に看護師は、看護師の業務拡大により抗がん薬を投与する機会が増え、実践の中で曝露の機会が最も多い職種であり曝露対策に努める事が重要である。曝露対策において推奨されている環境・物品は、生物学的安全キャビネット (BSC)、閉鎖式薬物移送システム (CSTD)、個人防護具 (PPE) である。化学療法センター内で実施した曝露調査の結果と、化学療法センターで現在実施している曝露対策、今後の課題について報告する。

19. 入退院センターより依頼される心臓超音波検査における所見検出率と、周術期管理が必要となった割合の調査

検査技術部 生体検査課¹⁾ 入退院支援課²⁾

丸田 稔¹⁾ 住ノ江功夫¹⁾

松崎 俊樹¹⁾ 箕田 直樹¹⁾

田淵 裕子¹⁾ 大西由希子¹⁾

佐竹 郁哉¹⁾ 岩佐恵梨花¹⁾

左古田悦子¹⁾ 水田 裕一¹⁾

松下 春風¹⁾ 山本 繁秀¹⁾

田中久美子²⁾

〈要旨〉

現在、当課では心臓及び下肢深部静脈超音波検査の予約枠において「入退院センター枠」を設け、手術前のリスク把握がスムーズに行われるための取り組みを行っている。

入退院センターの依頼は年々増加しており、今年度(2021年4月～11月現在)で既に600件を超える依頼が出ている。そこで、今回我々は心臓超音波検査を対象に、検査結果が患者や臨床にとって有益なものとなっているのか、所見の検出率と、結果により周術期管理が必要となったかを後ろ向き調査した。

2021年4月より、入退院センター枠より依頼された心臓超音波検査を対象とし調査した。

軽微な異常所見は全体の89%で認めた。循環

器的に有意な異常所見は全体の58%で認め、それぞれ周術期管理が必要・延期・中止等の対応が施されたことがわかった。手術前の心臓超音波検査が患者、臨床にとって有益であることを改めて認識する結果となったため、その詳細を報告する。

20. 血液製剤の適正使用に向けた取り組み

検査技術部

古市 佳奈 大橋 裕子

古川 恵子

麻酔科

倉迫 敏明

内科

平松 靖史

医事課

野口由起子 大西 真代

企画課

中谷 浩久

看護部（8階東病棟）

平井 香恵 磯部 直子

【はじめに】

当院では、H30年に輸血療法委員会の下部組織として輸血対策プロジェクトチーム（以下輸血チーム）を立ち上げ、血液製剤の使用指針に準じた適正使用を推進してきた。その取り組みの一つとしてR2年4月より輸血前に検査技師から医師への疑義照会を開始した。

【取り組み】

RBC、PCを対象とし、これまでの症例検討の結果からRBC輸血はHb7g/dL、PC輸血はPlt2万/ μ Lを基準と設定し、基準を超えたオーダーがあれば医師へ疑義照会を行い、病態に応じて輸血が適切かどうかを確認した。

電子カルテに輸血理由の記載があり連絡不要と判断した場合は記録のみ残すこととした。

【結果】

査定件数はR3年度（1月時点）とR1年度と比較しRBCは84%、PCは62%減少した。

【考察】

疑義照会基準の統一、輸血チームの存在が疑義照会のしやすさにつながった。

疑義照会件数、査定件数が減少していることから血液製剤の適正使用が院内に広がっていると考えられる。

21. 当院における造血器腫瘍のリハビリの現状と今後の課題

リハビリテーション技術課

岡 智子 堀川 晃義

皮居 達彦 西野 陽子

行山 頌人 井上 貴博

井上 紗希

リハビリテーション科

田中 正道

地域がん診療連携拠点病院の中で、がんのリハビリの役割は大きくなっており、がんリハビリ件数は、年々増加している。中でも、血液内科からの依頼件数は、ここ5年で約2倍に増加している。がんのリハビリガイドラインでは、化学療法・放射線治療中、その後の患者さんに対して運動療法を行うと身体活動性や身体機能、QOL、倦怠感という、いずれの症状の改善も見込めるということが、高い推奨レベルとなっている。また、身体機能を改善することで治療選択肢が広がったり、生存期間が延長したりという可能性についても示唆されている。今回、より効果的なリハビリを提供することを目的として、造血器腫瘍のリハビリの現状調査を行った。

がんリハビリの現状と今後の課題について若干の考察を加え報告する。

22. 教職員の働きやすい職場環境をめざした取り組み

姫路赤十字看護専門学校

藤元由起子 中林 朝香

八幡 宏美 石谷 尚美

小野 真弓 神戸真由美